

例文にやさしい英語学に向けて*

葛西清蔵

本稿はつぎのような章だてにしたがって議論をすすめ、言葉の研究には理論を偏重するのではなく、それを支える言語事実そのものを注視することからはじめるべきであることを主張する。

1. 不安定な借り物の視点
2. 泣いている例文たち
3. あらためて言葉の科学とはなにか。H. Sweet, O. Jespersen を中心に
4. 例文にやさしいいくつかの説明例
5. まとめ

1. 不安定な借り物の視点

福井 (2001 : 109) は「日本における理論言語学の教育および研究は危機的な状態にある」とのべている。これは、日本の言語研究と教育についてのべたものであるが、じつは、この状況はもっと根が深いものであるようである。

まず、「英文学研究」(第75巻第2号)で、選考者は掲載該当者がいないことについて、「先行研究・関連分野への不十分な理解」が原因であることにふれている。言語の研究・教育に見られる危機的な状態は、言語にかぎるものではないことは、日本の思想についてのべた丸山 (1961 : 6, 7) にも明白に示されている。「日本の論争の多くはこれだけの問題の解明もしくは整理され、これから先の問題が残されているというけじめがはっきりしないまま立ち消えになってゆく。そこでずっと後になって、何かのきっかけで実質的に同じテーマについて論争が始まると、前の論争の到達点から出発しないで、すべてそのたびごとに

イロハから始まる(中略)「思惟の経済」の点でもはなはだ無駄なことが少なくない」。(1)

言語研究に見られる傾向は、さらに広くは、日本人の思想、ものの考え方全体に見られるものであることが示唆されている。さらにいくつかの、ほかの分野についても見てみることにする。

日本の近代思想について、久野・鶴見(1956:i)は、「現実にはたらきかけ、現実を動かした日本の代表的思想流派の仕事をちゃんと評価しなければ、日本の思想の足どりをしっかりさせることはできない。これまでの日本の思想は、フラフラしたちどりの足どりをまぬかれていない」という。これは重ねて日本の思想について、その不安定さを指摘したことになる。

日本の経済学について、奥村(2004:i)は、「自分の判断力で物事を考え、現実のなかから理論をつくりだしていくことができなくなってしまっている。それは、明治時代以来100年以上も続いていて、日本人の体質になってしまっている」という。さらに、このことについて、「これは経済学者というより、外国理論の輸入業者といったほうがよい。(2)そして輸入元の理論が変わるたびにいち早く新しい理論を日本に輸入するから流行がクルクルと変わる」(2004:121)という。(3)

さらに物理学の世界にもまったく同じような事情がみられるようである。「大体日本の物理屋はそとの状勢でふらふらし過ぎる」と朝永(2000:257)はその視点の不安定さを指摘する。

以上みてきたところでも、「けじめがいつこうにはつきりしない」、「クルクルと変わる」、「ふらふらし過ぎる」、「フラフラしたちどりの足」、など日本人のものの考え方が不安定であることをよく表している表現といえるが、これは、川西(2004:iii)の「日本人は明確な「私」を持たず、「家」をももたない。すべては宙ぶらりんで曖昧である」という言葉のなかの「すべては宙ぶらりん」という表現に典型的に示されているように思われる。では、どのような理由でこの不安定さは生まれるのであろうか。各分野で共通に見られるこの不安定さには、そのもとになっているようなことがあるのであろうか。以下ではこのこ

とについて考えてみたい。

まず、言語学者田中（2004：123、4）が、『ことばとは何か』で述べているところからみることにしよう。氏は「日本にかぎらず思想的、精神的な後進国では、みずからは思考せず、新しい流行が現れるやいなやその信者になるという風土にあっては、新しい理念や思想はどこかに天才があらわれると、そこをめがけて、まるで空虚から降ってくるように思われているふしがある」と、自らは思考せず、新しい流行に飛びつくのは、思想的、精神的な後進国でみられることで、日本にかぎらない、とする。

この新しいものにとびつこうとすることが、つまるところどうなるかという点、「あまりに目まぐるしく「変化する」言語理論の技術的側面に追従するのに精一杯で、理論がそのようになった「樹木」の部分にまで考えを余裕がない場合がある」ことになり、結局はその「技術」の背景にある科学を見失ってしまう」と郡司（2004：158）はいう。つまり「多くの情報だけが頭上を素通りしていくばかりで、それを把握して自ら判断するための方法が身につけていない」（内藤 2004：202）ということになる。新しい理論を追いかける、そのことだけのために関心が向いているために、そのよって立つ、いちばん重要な部分が留守になってしまっている可能性がある、ということであろう。

当面のわれわれの問題にひきつけていえば、細江（1942：346）の「在るものは所謂理論を偏重して英語の実際を見失ひ、在るものは分析これ力めて綜合に欠くところあり、又在るものは先人に囚われ伝統に泥み、誤れる旧套の脱却せられざるもの等なきにしもあらず」ということになる。

新しいものを追いかけるのに熱心なあまり、今していることの意味、その理由を見失うことは、最も警戒しなくてはならないことであろう。このことに関連して、こういう傾向は、かなりふかく日本人の体質にしみこんでいるらしいことは、つぎのベルツの言葉にも伺われ、われわれは、このことの意味をはっきり心にとめておかななくてはならない。

「かれら（＝外国から招聘された科学者：引用者）は種をまき、その種から日本で科学の樹がひとりでに生えて大きくなれるようにしたのであって、その樹

たるや、正しく育てられた場合、絶えず新しい、しかもますます美しい実を結ぶものであるにもかかわらず、日本では今の科学の「成果」のみをかれらから受取ろうとしたのであります。この最新の成果をかれらから引き継ぐだけで満足し、この精神を学ぼうとしないのです」(1979:239)

このベルツのことばこそ、「不安定な借り物の視点」の原因が根深いものであることを示している。われわれはこのことを真摯に受け止めなければならない。

2. 泣いている例文たち

前章では、日本の学問は、新しいものをも求めるのに性急なあまり、その新しい理論の、よって立つ事実よりも体質的に、理論偏重の傾向があることをみた。この章では、事実軽視のこの傾向が、現在の英語学にどのような形でみられるかをいくつかの実例でみることにしたい。

2.1 1a Who do you know unlocked Fermat's Last Theorem?

b フェルマーの最後定理はだれが解いたかを知っているかい?

野村 (2004:69)

(1a)の文は(1b)の日本語をそえて、ミニマリスト理論の「素性照合」(feature checking)で、unlockの主語は、なぜ、youでなくてwhoなのか、を論ずる箇所であげられているものである。つぎの(2a、b)の基礎的な例文をみるまでもなく、(1b)のような意味での(1a)の文は存在しない。

2a Do you know who he is? (彼がだれかを知ってるか)

b Who do you think he is? (彼をだれだと思うか)

安藤 (1999:316)

このような基本的なところで誤りのある例文を土台にして、どういう議論ができるのであろうか。さらにつぎの例をみよう。

2.2 3a Excuse me. Could you direct me the way to the station?

今井 (2002 : 88)⁽⁴⁾

b Could you direct me to the station?

c Could you show me the way to the station?

(3a) のような英語はない。おそらく direct に (3c) の show のような用法があると誤解したものであろう。この著者は、この著書の一部を雑誌論文として著書以前に発表しており、そこでも同じ例文を同じように使っている。(3a) を正しいと考えているのであろう。これも基本的な事実の軽視である。

2.3 (4)a Necessary is the mother of innovation.

b 必要は発明の母

松本 (2000 : 147)

これは「この mother の意味は、出産のモデルに基づく意味を抽象的に写像することによって成立する」ことを示すためとして (4b) の日本語とともにあげられているものである。いうまでもなく、(4b) に対応する (4a) の文は、Necessity is the mother of invention. でなければならない。認知文法の重要な点をめぐる例文であるはずであり、実例を軽視しているといわれてもしかたがないであろう。最後につきの例を見よう。

2.4 (5)a The doctor wanted [that the patient be in bed (for a week)]

b The doctor believed [that the patient was in bed (at that time)]

c The doctor ordered the patient [that he be in bed (for a week)]

Imai et al. (200 : 120)

この (5a) の文は、(5b、c) と同じレベルで容認できる文なのであろうか。小西 (1985) は、want が that 節をとる例について、「一般にこの例は非標準とみなされている」としている。また、only、solely、just などとなら起こりうる、とし I want only that you be happy. という例文をあげている。しかし、(5a)

の例文には、only、solely、just のいずれもない。なお、小西には、上記の例文につづけて「should の省略に注意」とあるが、Quirk et al. (1976 : 843) には He wanted that everybody should be present. という例文があり、この文には、only、solely、just のいずれもない上、省略さるべきとされる should がでている。(5a)の例文はきわめて適切さに欠ける例といわざるを得ない。その目的を 'to help enhance the proficiency in English of those who have gone through high school'、'to pave the way for more advanced studies' (Preface: iii, iv) とする Imai et al. としては、より問題のない例文を使うべきであろう。これは言語事実の軽視である。

以上、この章では、事実軽視のいくつかの場合をみた。ここでは、理論とそれをささえるべき事実が完全に乖離し、理論は、それを支えるべき事実とは別のもののように扱われていた。ここであらためてことばの科学はどうあるべきかを考え直してみなければならない。これがつぎの章の目的である。

3. あらためて言葉の科学とはなにか。

H. Sweet, O. Jespersen を中心に

3.1 あらためて言葉の科学とはなにか。

以上でみたような事実軽視・理論偏重の状態を脱出するにはどうすべきであろうか。

広辞苑には、科学は「体系的であり、経験的に実証可能な知識」とある。簡単に「体系的な知識」といっていい。科学全体について、自然科学者である中谷 (2003 : 205) はつぎのようにいう。「科学というものは、普遍的な客観性をもつということである。」ここで重要なのは「客観性」ということである。十分に客観的であれば普遍的でありうる。そこで、どうすれば、その客観性にいたる方法を見つけだすことができるであろう。その方法とはどんなものでしょうか。これについては、研究者の意見はかなり一致している。たとえば、福井

(2001:204)は、「対象になる現象を注意深く観察し、その中から一般性を抽出」することだといひ、また、田島(2001:203)は、「丁寧に、じっくりと第一資料(テキスト)を読み、考える」ことだといひ、益岡(2004:152)は、「通説にとらわれることなく言語事実を直視し」、「自分の頭で考える」ことだとする。⁽⁵⁾

注意したいのは、それぞれの主張のなかには「理論」といいう言葉が一つもでてこないことであろう。事実から規則性をひきだすには「理論」は関わってこない。このことを支持する主張をみよう。高見・久野(2002:441)がいうように、「事実を軽視して間違った理論上の一般化を求めることは、慎まなくてはならない」そして「言語現象の分析で重要なことは、まずその言語現象を仔細に検討して、その現象の適格性を左右している要因を探しだすこと」だとする。つまり「言語の実際の姿を、そのあるがままの姿に於いて認識しなくてはならない」(細江1942:346)のである。第一章で見た「視点の不安定さ」は、そのよって立つべき事実を軽視していることにあることになる。まず、「特定の理論を離れ、事実をありのままに見つめる」ことから始めなくてはならない。

3.2 さて、ここで、科学としての英語学のはじめの人といわれる H. Sweet と、彼に私淑した O. Jespersen の考えをみよう。

まず Sweet について、われわれの関心とふかく関連すると思われるのは、つぎの箇所であろう。

‘The first object in studying grammar is to learn to observe linguistic facts as they are, not as they ought to be,...’ (1981:20)

つまり、言語事実を、「あるべき姿」においてみる(これはまさしくそれまでの、ラテン語をモデルにした規範文法のみかたであるが)のではなく、言語事実を「ありのまま」にみるのが重要だといふのである。これこそ、上で、くりかえし見てきた主張そのものである。ここには、事実をみるときに、特定の理論に

依存することなどはまったく考慮のそとにあることに注目しておこう。つぎに Jespersen の述べるところをみよう。

「言語学でもっとも重要な人物といえば、誰をあげますか」という質問にたいして、Chomsky は「Jespersen が、きっと、もっとも深く考えていたはずだ」(Maher, J. and J. Grove 1998 : 24) と答えている。また、ローマン・ヤコブソン (2004 : 90) は「ノウム・チョムスキー (Noam Chomsky) を魅了した二冊の本、フンボルトのものともう一冊オットー・イエスペルセンの著書」という言い方をしている。これだけをもても Jespersen の言語学のなかでの位置付けがわかるが、Jespersen 自身のことばをみよう。

‘文の規則を見出す場合にも実際の生活の中で現実に話され、了解されているありのままの状態を考えたいと努めているのです’ (1971b : 43)

ここでも、はっきり「ありのままの状態」という表現がみられる。

以上、事実軽視、理論偏重の傾向をあらためるべく、言語において科学とはなにか、を問いなおした。そして、言語の科学では、「まず理論ありき」ではなく、あくまでも言語の個々の事実を「ありのまま」見ることからはじめ、そこから規則性をさぐりあてる、という方法によるべきである、ということにたどりついた。⁽⁶⁾

つぎの章では、いま見てきた方法により、いくつかの例を、とくに「事実をありのままに見る」とした Sweet、Jespersen などの考えを中心にしながら、観察し、それらの性質を探ってみたい。

4. 例文にやさしいいくつかの説明例

4.1 まずつぎの例から見よう。

(6)a I persuaded John to leave. ~ I persuade John [PRO to leave]

b I expected John to leave. ~ I expected [John to leave]

この(6a、b)の文は persuade は John を目的語としているが、expect は John to leave を目的語にしている点でちがう。これをそれぞれ右のように示すことができる。

ところで、この違いを指摘したものはいないと Chomsky (1965:22) は、つぎのようにのべている。

‘In fact, so far as I have been able to discover, no English grammar has pointed out the fundamental distinction between these two constructions.’

この違いに関わると思われる箇所を Sweet などで見えていくことにしよう。

(7)a I like boys to be quiet.

b I like [boys to be quiet]

Sweet (1891:48) で、(7a) について、この文は ‘does not imply even the slightest liking for boys’ とのべており、boys が like の目的語ではないことを示している。つまり、(7a) は、(7b) として表せるものであり、だとすれば、(6b) と少しもちがわない。また、(7a) について、Zandvoort (1945:15) は、‘may be said by a master who does not like boys at all’ といっているのは、上の Sweet の考えを十分に支持するものである。

さらに注目したいのはつぎの例である。

(8)a I ordered him to go.

b I wished him to go.

Kruisinga (1911 : 82, 83) は、(8a) について、‘the pronoun is plainly the object of the predicative only’ といひ、(8b) について、‘the pronoun can in no way be considered an object of wish, but the subject of the following stem’ という。(‘stem’=「動詞幹」=‘to go’ : 引用者)

Chomsky (1965) でのべた (6a)、(6b) の違いは、ここですでに述べ尽くされている。

persuade、expect の違いに Chomsky が気がつかなかったとのべたことについて、小西(1997 : 55) は、「Kruisinga...の著書を読んだ上でのことであろうか」と言っている。これは、今見たように、Kruisinga がすでに指摘した(7a)、(7b) の違いを、Chomsky が半世紀も知らないでいた、ということを示している。

この違いは、また Jespersen では、いわゆる Nexus object とされているものにかかわるものであり、(6b) I expected John to leave. では、John to leave、(8b) I wished him to go. では、him to go が、それぞれ expected、wished の Nexus object である。

4.2 さらにいえば、Jespersen の Nexus による分析の適切さは、つぎのような場合にも見られる。

(9)a I found the bird flown.

b S V O (S²P) (1937 : 52) (P=predicative [賓語] : 引用者)

(10)a Too many cooks spoil the broth.

b S (3PS²) V O

c Too many cooks = the fact that cooks are too many, etc.

d that there are too many cooks 毛利 (1962 : 141)

(11)a No news is good news.

b S (PS²) V P (21) (1937 : 52)

- c 'receiving no news' Quirk et al. (1985 : 792)
d [there not being any news] 村田 (2005 : 175)

(9a) では、飛び去ってしまった bird が found の目的語になるはずはなく、the bird flown という Nexus が found の目的語になっている、というのはいかにも直観に則している。また、(10a) の Too many cooks、(11a) の No news をそれぞれ、(3PS²)、(PS²) に見るように「コックが多いこと」、「便りのないこと」と Nexus としていることも適切である。これは (11c、d) でも確認できる。このことから見ると、

- (12) [we [believed/persuaded [Paul to [be nice]]]]

について、'the same underlying and surface syntactic representation' (William and Dubinsky 2004 : 100) などというのは、believe、persuade というまったく振るまいのちがう動詞のすでに知られていた基礎的な区別を無視したものである。これなどは、自分の理論のために事実を見誤ったものであるといていい。

4.3 つぎの例はどうであろう。

- (13)a He slept himself sober.

- b S V Or(S P) (r=result : 引用者) Jespersen (1971a : 52)

Jespersen (1983 : 311) は、(13a) について、'intransitive verbs, which otherwise have no object, also admit this construction' という。this construction とは、object of result (「結果の目的語」) のことで、(13b) では、himself sober という Nexus が結果の目的語となっているというのである。さらに、注意すべきことは、すでに今から 100 年ほど前に、Onions (1904 : 94)

は、‘to express relations of the vaguest kind’ の例として、

(14) to cry oneself hoarse

をあげ、これ「自動詞と併用」されている「特殊な対格の用法」であるという。

以上で、この種の「結果構文」の性質は明らかになったといえる。(これまでの説明には「理論」はつかわれてはいないことに注目しよう。)

4.4 さらにつぎの例を見よう。

(15a) John is eager to please.

b John is easy to please.

表層的には、まったく同じこれらの文は、Johnが(15a)では、pleaseの意味上の主語であるが、(15b)では、pleaseの意味上の目的語である点でまったく異なる。そのことを、初期の変形文法では、それぞれ(15a')、(15b')の構造をもつとして説明した。

(15a') John is eager for [John pleases someone]

b' [Someone pleases John] is easy.

これは両者のちがいを、実にわかりやすく説明してくれている。しかし、Jespersen (1971a: 52) では、(16a) の文を (16b) のように表わしている。

(16a) John is easy to deceive.

b S (O*) V P (2p1*)

そして、‘* *’について、‘words standing apart, but belonging together’

とあり、John が deceive の目的語であり、かつ、その文の主語となっていることを明示的に示している。とくに注目したいのは、主語であったものが目的語の資格をもつ「例外的格付与」(exceptional case marking)の考えは Zandvoort (1945: 203) にすでに見られる。

(17)a I consider him an honest man.

b S + P (o/s + p)

(17b) の 'o/s' がそれである。つまり him は consider の目的語 (o) であり an honest man の意味上の主語 (s) でもある。

4.5 さらに、つぎの例を見よう。

(18)a Herbert tended to accept bribes.

b *What tended to accept was (for) Herbert to accept bribes.

(18a) の文にたいして (18b) ができないことから、Hudson (1971: 1) は、'the SUBJECT clause is 'split'' とよんでいるが、この考えは Jespersen (1971a: 56, 57) に見られる。

(19)a He seemed to notice it.

a' S V $\frac{1}{2}$ S(10)

a" [_____ seem [he to notice it]]

b She happened to notice it.

b' S V $\frac{1}{2}$ S(10)

b" [_____ happen [she to notice it]]

これは、いわゆる subject raising (主語上昇規則) にかかわるものである。

この規則によると、(19a")の he は、seem が自動詞のため、格をもらえないため、格フィルターにかかり排除される。それで、he が格をえるために主語の位置移動される。これを Jespersen では、(19a")、(19b")のように後に特定の理論で説明可能だとされる事例は、それ以前の研究のなかで、その性質がきわめて正確にとらえられている。

以上、話題になりやすい例文について、Sweet、Jespersen を中心とする過去の研究者の扱いをみてきた。そこには英語の言語事実を率直にみつめることにより、それらの事実のもつ性質が素直にひきだされているのを見ることができると。逆に、後に、特定の理論により、それらの事実がそのままのかたちで生かされていない場合のあることも見た。

5. まとめ

まず、第一章では、日本の理論言語学が危機的状態にあることから出発し、これは、日本の思想界でもみられることであり、そのふらふらした不安定さは、経済、物理、文学など、各界に見られる一般的傾向であることを指摘した。しかも、これは、ベルツが指摘するように、そのよって立つところよりも結果のみを取り入れようとするところに原因があるのではないかと指摘した。第二章では、理論のよってたつところの事実よりも、理論のみを問題にする理論重視の傾向は、日本の英語学のどんなところに見られるかを「泣いている例文たち」として具体例をあげた。ついで、第3章では、以上のことをふまえ、言語学において、科学とは何かを、問い直した。そこでは、言語そのものをありのままに見ることからはじめ、そこから何かの規則性をさがしだす、という方法であるべきだ、ということを確認した。第四章では、前章をふまえ、いくつかの例をあげて、とくに Sweet、Jespersen などの述べていることをみた。そこでは、現代の言語理論のはるか以前に、その言語理論を超えた説明をしているもの、現代の言語理論にみられる説明の萌芽をみせているものがあることがわかった。なお重要なことは、現代の言語理論のなかには、過去に言語事実から導き

だした法則性を無視し、理論で事実をまげてしまうようなことまであることをみた。これは科学のとるべき道ではない。まさしく、事実軽視、理論重視の結果であり、影山 (2001: 39) のいう「日本人としての独自性がない」ことにつながることになるのであろう。「外国にアンテナばかり向けないで、もう一度、きっちりと自分たちの足元を見直すべき」(井上・平田 2003: 288)である。もっと理論そのものより、その理論のよってたつ事実をを重視し、じっくり考え、外国のはやりの理論は、「ときには知らん顔をすることも大切なことではないだろうか」(朝永 2000: 257) といえよう。広辞苑では、理論を「個々の事実や認識を統一的に説明することのできる普遍性をもつ体系的知識」と定義する。理論は個々の事実を説明するためのものであり、その逆ではありえない。第二章でみたような、言語事実と乖離したような理論、事実を軽視した理論は、もはや理論とよべるものではないということを心にはっきり留めておかななくてはならない。「対象をつくるのは視点」であり、性急な理論は事実を見誤らせることもありうる。Saussure の *Cours de Linguistique Générale* (1972: 23) に、つぎのようにある。‘C’est le point de vue qui crée l’objet.’ つまり「視点が対象をつくりだす」。

* 本稿は、2004年開催された「日本英文学会北海道支部大会」のシンポジウム「あらためて、英語学のすすめ」のなかで、発表したものである。

注

(1) 鹿野 (2002: 45) で、中国文学者竹内好のつぎの言葉を引用している。「日本では、観念が現実と不調和になると以前の原理を捨てて別の原理をさがすことからやりなおす (中略) そしてそれが進歩のように観念されている」といっている。

このような見方をすると、日本文化の開化について「我々の開化の一部、あるいは大部分はいくら己惚れて見ても上滑りと評するより致し方がない」

(夏目 2004 : 62) というのは残念ながら当たっていると言わなければならない。

- (2) 中村 (2005 : 289) には、次のような言葉がある。「ヨーロッパですこし有名な思想家が現れるとすぐひびいて」きてしまう。「おのれを空しうしてとりいれるのである。(中略) ただ紹介すればよいのである」。これも主旨はおなじであろう。この傾向について、町田 (2004 : 220) は「西洋で流行している学説を、時代性を考慮せず無批判に取り入れてもてはやすことの好きな日本人」という。「向こうのものが前後関係の脈略もなく、風土との関係もなく、そのままそっくり日本にとりいれられ」(岩波編集部 2000 : 123) るというのもこのことを示している。

このような日本人の性質は、名づけの方法にもみられ (渡辺 2005 : 126)、古くは「徒然草」の第 116 段にある「何事も珍しきことを求め、異説を好むは、浅才の人の必ずある事なりとぞ」の箇所は、われわれの述べていることと奇妙に一致する。

- (3) 日本の学問にたいする態度について、村上 (2004 : 172) はつぎのように厳しい。「研究者は、自分のタコツボのなかで、同僚だけを相手に、業績競争に明け暮れているだけで、研究者としての責務が終わると考えることができない時代にさしかかっている」。
- (4) 今井はこの例文に注をつけ、この例文は Sperber and Wilson (1988) に沿うものであるとのべているが、Sperber and Wilson にはこのような例文はない。なお、1988 は 1986 の間違いである。
- (5) 大野 (2004 : 81-82) は、「徹底した信仰や、力づくの争いによって明確な勝ち負けきめる所から学習される論理性の一貫を重んじる気風は、温和なこの土地では育たず」と、日本人が、徹底的に考え抜くことをしないことが、先に見た「不安定な視点」につながるであろう。
- (6) 司馬 (2005 : 418) は小林秀雄の研究態度について、「じっと穴のあくほど本質を見つめていくうちに思想ができあがっていく」、「まわりの状況や流行を一切、気にせず」といっているのは、まさしくわれわれの求める態度その

ものである。

参考文献

- 安藤貞雄 1999 『新英文法』 数研出版
- ベルツ 1972 菅沼訳 『ベルツの日記』 (上) 岩波書店
- Chomsky, N. 1965 *Aspects of the Theory of Syntax* The MIT Press
- 福井直樹 2001 『自然科学としての言語学』 大修館書店
- 細江逸記 1942 『精説英文法汎論』 泰文堂
- 郡司隆男 2004 「言語科学の提唱」 『言語の科学入門』 岩波書店
- Hudson, R. A. 1971 *English Complex Sentences* Amsterdam North-Holland
- 今井邦彦 2001 『語用論への招待』 大修館
- Imai, K., Nakajima, H., Tonoike, S. and C. D. Tencredi. 2002 *Essentials of Modern English Grammar* Kenkyusha
- 井上ひさし・平田オリザ 2003 『話し言葉の日本語』 小学館
- 岩波書店編集部 (編) 2000 『座談のたのしみ』 (下) 岩波書店
- Jacobson, R. 2004 山中桂一訳 『言語とメタ言語』 草書房
- Jespersen, O. 1937 *Analytic Syntax* [1971a 千城出版]
- Jespersen, O. 1971b *The System of Grammar* 宮畑一郎訳 『文法の組織』 文健書房
- Jespersen, O. 1983 *Essentials of English Grammar* George Allen and Unwin
- 影山太郎 2001 「日本語から英語学理論への発信」 『言語』 Vol.30 No.12
- 川西政明 2004 『小説の終焉』 岩波書店
- Kruisinga, E. 1931 *A Handbook of Present-day English* Noordhoff
- 久野 収・鶴見俊輔 1956 『現代日本の思想』 岩波書店
- 小西友七 1985 『英語基本動詞辞典』 研究社出版
- 小西友七 1997 『英語への旅路』 大修館書店
- 町田 健 2004 『ソーシャルと言語学』 講談社

- Maher, J. and J. Groves 1988 *Introducing Chomsky* [芳村 京訳『チョムスキー入門』明石書店 2004]
- 丸山眞男 1961 『日本の思想』岩波書店
- 益岡隆志 2004 『三上文法から寺村文法へ』PHP新書
- 松本 曜 (編) 2003 『認知意味論』大修館書店
- 村上陽一郎 2004 『科学者とは何か』新潮社
- 毛利可信 1962 『英語意味論研究』研究社
- 村田勇三郎 2005 『現代英語の語彙的・構文的事象』開拓社
- 内藤正典 2004 『ヨーロッパとイスラーム』岩波書店
- 中村 元 2005 『比較思想論』岩波書店
- 中谷宇吉朗 2003 『科学の方法』岩波書店
- 夏目漱石 2002 『私の個人主義』講談社学術文庫
- 野村泰幸 2004 『ことばの獲得』くろしお出版
- 奥村 宏 2004 『判断力』岩波書店
- Onions, C.. T. 1904 *An Advanced Syntax* Kegan Paul
- 大野 晋 2003 『日本語と私』新潮社
- 大野 晋 2004 『日本語の水脈』新潮社
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and J. Svartvik. 1976 *A Grammar of Contemporary English* Longman
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and J. Svartvik 1985 *A Comprehensive Grammar of the English Language* Longman
- Saussure de, F. 1972 *Cours de Linguistique Générale* Payothèque
- Schachter, P. 1977 'Constraints on Coordination' *Lg.* 53-1: 86-103
- 司馬遼太郎 2005 『司馬遼太郎が考えたこと 11』新潮社
- 鹿野正直 2002 『日本の近代思想』岩波書店
- Sperber, D. and D. Wilson 1986 *Relevance: Communication and Cognition* Blackwell Pub.
- Sweet. H. 1981 *New English Grammar Part 1* Oxford Univ. Press

例文にやさしい英語学に向けて（葛西清蔵）

- 田島松二 2001 『わが国の英語学 100 年』 南雲堂書店
高見健一・久野 2002 『日英語の自動詞構文』 研究社
田中克彦 2004 『ことばとは何か』 筑摩書房
滝田文彦 1975 『言語・人間・文化』 日本放送出版会
朝永振一郎 2000 『科学者の自由な楽園』 岩波書店
渡辺克義 2005 『ポーランド語の風景』 現代書館
William, D. D. and S. Dubinsky 2004 *The Grammar of Raising and Control*
Blackwell Pub.
湯川泰敏 1999 『言語学』 ひつじ書房
Zandvoort, R. W. 1960 *A Handbook of English Grammar* Maruzen